

第1話 室町幕府の盛時

足利氏の開いた室町幕府は、義満の時代が最も盛んでしたが、それには管領細川頼之の補佐の功が多かった。義満は奢りを極めて僭上な行いが多かった上に、我が国体をも蔑ろにした。

室町時代

第99代後亀山天皇が足利義満の願いをお許しになって、吉野から京都にお還りになり、神器を北朝の後小松院にお伝え申したので、ここに始めて南北両朝は合一し、後小松院は第100代後小松天皇と申し上げる事になると共に、義満も初めて正統な将軍となったので、これまで室町の足利氏の邸内に設けていた役所も正統な幕府ということが出来るようになった。

戦国時代

幕府が室町に在ったので、これを室町幕府と言ひ、この幕府で政治を行った時代を室町時代と言う。普通、両朝の合一した1392年から凡そ180年ばかりの間を指しているが、その実際は、足利氏に勢力のあったのは僅かに始めの約50年位のもので、その後は、将軍はただ名義ばかりの長となり、幕府の命令は一向に行われなかった。とりわけ後の100年ばかりは、地方の武士の間に領地の奪い合いが起こって、殆ど全国の各地に戦争の絶え間が無かった。それで、その間を別に戦国時代といっている。

室町幕府の組織

室町幕府の組織は、大体に於いて鎌倉幕府に似ているが、細かい点では多少の違いがあった。

三管領

先づ管領といって、将軍を輔けて政治を行う役があった。鎌倉幕府の執権に当たる役です。言うまでもなく、最も重い役ですから、足利氏も特にこれを重んじて、その一族である細川、斯波、畠山の3家の中から1人を選んで就かせる事に定めていた。従って、世の人々はこの3家を三管領と言った。この職名は、初めは執事といったもので、中でも尊氏の執事の高師直などは、その権力の盛んなのに任せて、わがままを働いたのでも有名です。この執事を管領と改めたのは義詮の時代で、斯波義将が執事であった時です。

次には評定衆といって、常に将軍および管領の相談に與かる役の人々になり、又、引付衆といって、主なる訴訟や恩賞の事なども決する役の人々がいました。政所は鎌倉時代には非常に重い役所でしたが、室町時代にはただ財政に関する事を掌るだけで、その長官を執事と言った。門注所も鎌倉時代には訴訟を決する所でしたが、室町時代にはただ記録や證券のことを掌り、証拠書類の鑑定などをするだけの所となった。長官をやはり執事と言った。

四職

第1話 室町幕府の盛時

侍所は鎌倉時代と同じく、内裏や幕府を衛り、警察の事もつかさどれば、刑罰の事をも執り行った。のみならず、一旦事変の起こった時には、軍奉行となつて、軍勢を統べることにもなつていた。随つて、はなはだ勢力があつた。長官を所司といい、赤松、一色、山名、京極の4家からこれに任せられることになつていた。これを四職といつた。三管領に対した言葉で、管領の3家についてこの4家に勢力がありました。この外にもまだ各種の奉行があつた。

守護と地頭

また、地方には、鎌倉に關東管領、九州には九州探題を置いた外に、奥羽に奥州探題と羽州探題を置き、諸国に守護と地頭を置いた。

しかし、ただ1つ注意すべきことがある。それは室町時代の守護や地頭の多くは、幕府が出来てから任命されたものではなくて、却つてその反対に、これらの守護や地頭の力を借りて幕府が出来たのだという事です。嘗て頼朝が全国を平定した時には、自分の部下の手柄のあつた者らを諸国の守護や地頭に任じたのですが、今度は、その守護や地頭の力のあつた者らが足利氏の身方となつて、全国を一統することを足利氏に得させたのだという事です。

従つて、これらの守護や地頭は、初めから幕府の命令を重んじないという風があつた。それに又、尊氏は朝廷に叛いて起こつたのですから、身方の武士らが、いつ帰順して官軍にならないとも限らないのを恐れて、その機嫌を取るために恩賞を重くしたので、部下の諸將に領地の大きなものが多く出来て、その実力が足利氏に劣らない者さえいました。

その点からもまた、幕府の命令を守らない者が少なくなかつた。これは幕府が全盛の時代でも既にそうでしたから、後に勢力が大いに衰えてからは、諸国の守護らがめいめいに自分の領地に拠つて、幕府から独立したのも当然だといえます。

管領 細川頼之

さて、室町幕府の全盛を極めたのは義満の時代ですが、その初めの間は、義満がまだ幼少だったので、管領の細川頼之がこれを輔けて政治を執つた。頼之は実にすぐれた人物でして、政治の仕方が良かったので、足利氏の勢いは大いに盛んになり、幕府の基礎もこの時からようやく固つたのです。しかしそれと同時に、頼之の勢いもまた甚だ盛んでしたので、彼の政治の厳しいのを嫌う者らは、これを妬んで排斥しようとした。

義満は頼之が自分を輔けて、教導してくれた恩をよく覚えていたし、頼之は悪くない事も知つていたので、初めの間は、双方の間に立つて宥めたり慰めたりしていましたが、頼之を排斥しようとする者は次第にその数を増して、終にはこれを抑え止める事が出来なくなつた。それで、義満は止むなく頼之に管領を止めさせる事にした。長慶天皇の天授5年の事で、義満が22才の時でした。頼之は京都の邸を焼いて一族と共に自分の領地の讃岐に帰つたが、この時に詠んだ有名な詩がある(右側は訳注です)。

第1話 室町幕府の盛時

じんせい はづ なきをこう
人生五十愧、無功

かぼく はる すぎて なつ すでに なかばなり
花木春過夏已中

まんしつそうよう はらえどもがたし つくし
満室蒼蠅掃難、盡

さつて たづねて ぜんとうを ふさん せいふうに
去尋禪榻臥清風

こうな は
人生五十、功無きを愧ず。

かぼく はる す すぎで なつ なか
花木は春を過ぎて、既に夏は中ばなり。

へや あお はえ はら ばら つ がた
室に満ちる蒼い蠅を掃えども払い尽くし難い。

さ ぜんとう こしかけ さが きよ かぜ やす
去って禅榻（腰掛）を探して清い風に休むか。

です。「人間も50才になって功のないのは恥づかしい。花の咲いた春は過ぎて夏ももう半ばになった。部屋の中は蠅がうるさくて追いきれない。どれ、涼みに台にでも行って、ゆっくり休もうよ」という意味です。ハエがうるさいから余所へ行こうというので、頼之の本心は辞めたくなかった事がよく分かりますが、義満が將軍の威勢を以ってしても部下の者らを抑えつけることが出来なかったのです。

しかし、義満はこうして一旦頼之を退けたが、その恩を忘れることは出来なかったのです。その後、厳島に遊んだ時には、わざわざ讃岐に回って頼之を訪ね、後にはまた京都に呼び返して管領にしました。

めいとく らん 明德の乱

細川頼之が再び管領になったのは、後龜山天皇の元中8年（北朝の明德2年）の事でしたが、その年の12月、山名氏清が幕府に叛いて京都に迫って来た。その頃山名氏は因幡、伯耆、但馬、丹波、丹後、美作、出雲、隠岐、紀伊、和泉の10ヶ国および若狭の今富庄を領して、全国の六分の一をもっていたので、世に六分一殿と称せられた。頗る富んで強かったのも、しばしば將軍の命に従わないことなどもあったが、ついに兵を起して叛き、京都に進んで来たのです。頼之らはこれを拒いで、京都の内野（昔の大内裏の跡）で戦い、大いにこれを破って山名氏清を斬った。これを明德の乱といいます。

かくして山名氏の領地は、翌9年の正月に、その戦いに功のあった諸将に分けて与えられた。細川頼之は、久しく山名氏が勢いに任せてわが儘を働くのを怒っていたが、ここにこれを滅ぼして安心したのか、間もなくその3月に死んだ。年は64才でした。義満は大いにこれを悼んで、その葬儀には自ら竹杖を突き、草鞋を穿いて柩を送ったということです。

なんぼくちよう ごういつ 南北朝の合一

南北朝の和睦が整い、後龜山天皇が京都にお還りになったのは、その年の閏10月でした。すでに義満は山名氏清のような富んだ大名を討ってこれを滅ぼした上に、ここにまた北朝の後小松院を正統な天皇と仰ぎ奉るようにしたので、その手柄もあって、いよいよ威望が高く、今は殆ど何事も思い通りにならないことは無いようになりました。



あしかがよしみつ
足利義満

かくて2年の後に、彼は37才で將軍職を子の義持に譲り、自分は強いて朝廷に請うて太政大臣に陞った。太政大臣は、昔、文徳天皇の御代に藤原良房が任ぜられてから、藤原氏の人々でこれを任ぜられた者は多かったが、武士では平清盛が1度任ぜられたばかりでして、他には誰もいなかったのです。

第1話 室町幕府の盛時

よしみつ せんじょう 義満の僭上

しかし、**義満**は間もなくこれをも辞して、出家して名を**道義**（訳注：道德の筋道の意）と改めた。けれども、**將軍の義持**はまだ僅かに10才の少年でしたので、政治はやはり**道義**の手を離れなかったので、その勢いは少しも衰えなかった。それで、**公卿**を始め朝廷の役人らが皆争って彼の**機嫌**を取ることに努めたので、彼はますます増長して、遂に**応永3年**の9月、39才の時に、**比叡山の延暦寺**に参詣した時には、その行列を上皇の御幸に真似て、**関白**以下の公卿に供をさせるに至った。実に**驚き**入った**僭上**（訳注：身分を越えて驕ること）で、その**大義名分**を乱した事は、**弓削道鏡**にも比します。

くぼう 公方

世間の人々もこれにはさすがに**驚いた**と見えて、いつしか**義満**の事を**公方様**と呼ぶようになった。公方というのはもとは皇室の尊称でしたが、**義満**の**僭上**を極めた**さま**が、公方のように**尊く**見えるという意味から、そう呼んだので、この後はそれが**將軍**の別名となりました。

よしみつ ごうしゃ 足利義満の豪奢

義満はまた、**奢**りを極めて**贅沢**を尽したのでも有名です。**長慶天皇**の**天授4年**、彼は21才の時に、**京都**の**室町**に自分の**邸**を造ったが、多年の戦乱で人々が困っている時であったにも拘らず、**お金**はかかるに任せて、**立派な建物**を造り、**庭園**には多くの**花木**を植えて常に**名花**を咲き満たせたので、世間の人々はこれを**花の御所**と呼んだ。

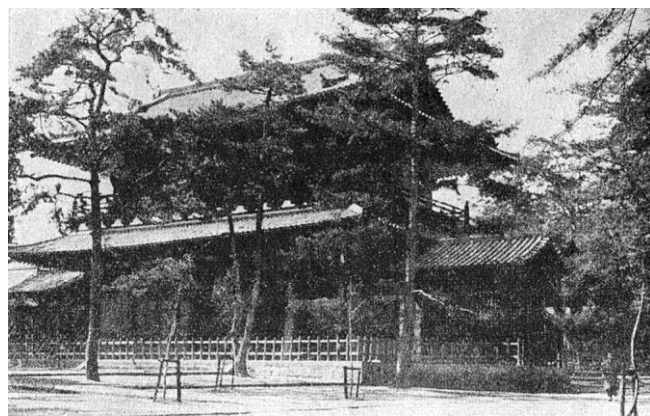
この外、新たに**相国寺**を造り、或いは**東寺**および**延暦寺**の**大講堂**や**興福寺**の**金堂**を改築したりして**お金**を使ったが、又、頻りに**諸国**に遊んで**豪奢**をも極めたのです。

とりわけ有名なのに、**紀伊**に遊んで**高野山**に参詣した事や、**駿河**に行つて**富士**を見た事や、**瀬戸内海**を船で**安芸**の**厳島**に参詣した事や、**伊勢**の**神宮**に参詣して**美濃**を経て帰った事や、たびたび**奈良**へ参詣に行った事などです。そういう場合には、彼は常に多くのお供を随えて、その行列を美々しくして人目を驚かしたのです。

もともと、ひとつには、これらの**諸国**にいた**敵方**の者らに**威勢**を見せつけて**威かし**にする意味もあったのだと言われています。

きたやま べつてい 北山の別邸

しかし、これらの事は皆、南北朝合一の前の事でしたが、彼が上皇の御幸を真似て延暦寺に参詣した翌年の**応永4年**、40才の時に、**京都市外**の**北山**に造った**別邸**に至つては、その**建築**といい、**庭園**といい、共に善



京都 上京区 相国寺

（**応仁の乱**に全山が**兵火**に罹った。今の**法堂**は**慶長10年**に**豊臣秀頼**が再建したもの。）

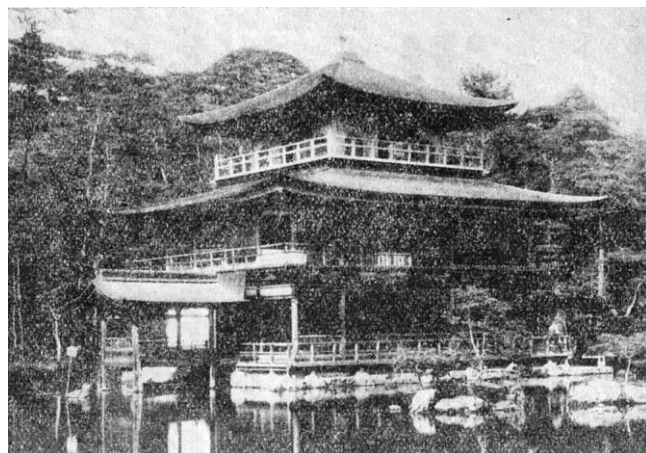
第1話 室町幕府の盛時

美の限りを尽したもので、時の管領の**斯波義将**が、「仏教でいう極楽でも、これ以上ではありませんまい」と**義満**に言ったという事が伝えられている位ですから、いかに**壮麗**なものであったかが分かるでしょう。

金閣

その中には**紫宸殿**とか、**殿上間**というような**内裏**にのみあるべきものを**まで**設けたということだが、その**贅沢**は**姑く許す**としても、この**僭上**には**実に**呆れ返らざるを得ないではありませんか。その後、たびたびの**火災**で、それらの**建物**の多くは**焼き失**せたが、その一部は**今も昔のまま**に残っている。

今、京都市上京区**金閣寺町**の**鹿苑寺**の境内に在る有名な**金閣**がすなわちそれです。これは**3階造り**の**建物**で、**第1階**と**第2階**とは**東西5間半**、**南北5間**、**第3階**は**方3間4面**（訳注：1間は1.8m）というのですから、その**大きさ**からいけば**大したもの**ではないが、その**第3階**は**柱から壁**、**天井**、**勾欄**にまで、**悉く金箔**を押したという**贅沢**を極めたもので、そのために、**世間の人々**はこれを**金閣**と呼びました（今は寺の名を**普通に金閣寺**というようになっていいる。訳注：その後、西暦1950年に**放火**で消失して、1955年に**再建**された）。



京都 上京区 金閣

この別邸が出来上がると、**義満**は**室町**のいわゆる**花の御所**を**将軍義持**に譲り、自分はここに**移って**、**古代**の**絵画**や**器物**などを**集めて**楽しんだり、**茶の湯**を**催**したりして、**悠々と日**を暮らしながら、**天下**の**政治**はやはり**自分の手**で決していた。それで、**世間**ではこの別邸の**在る土地**の名で彼を呼んで**北山殿**と言った。

こういう風に、**贅沢**を極めた**建物**を**こしらえ**たり、**大勢**のお供を連れて**諸国**を**遊び歩**いたり、又、**猿楽**という**遊び**のために**装束**を作ったり**舞台**を**設け**たりして、**大金**を**湯水**の如くに**使った**ので、**忽ち幕府**の**財政**は**困難**になって来た。

明との交通

その折から、**長崎**の**商人**で**肥富某**というものが**明**から**帰って**来たが、**義満**が**お金**に**不足**を感じているのを見て、**明**と**貿易**をすれば**利益**が多いと**いって聞**かせた。**明**とはその頃の**中国**の**国名**で、**わが後村上天皇**の**正平23年**、**義満**が**11才**で**将軍**となった年に、**元**を**滅ぼ**して**新た**に**起**こった**国**です。**義満**はこれを聞いて**大いに喜**び、**応永8年3月**、**祖阿**という**坊さん**に**肥富某**を付けて、**使者**として**明**に**遣**わした。彼らが**手紙**や**進物**を**明**に**持**って行くと、**明**の**太宗皇帝**は**喜**んでこれを**迎**えて、**翌9年**に**わが使**いを**送**り帰すかたがた、**先方**からも**使**いを**寄**越した。

義満の不臣不忠

義満はこの**使**いを**北山**の**別邸**に**迎**えて、**明**の**国書**を見ると、そこには、「**今度**、**日本国王源道義**が**わざわざ使**いを**遣**わして、**いろいろ**の**国産**を**献**上した**のは**、**忠義**の**心**が**篤**い**から**の**事**であり、**誠**に**感**心の

第1話 室町幕府の盛時

いた なが ころざし か
至りである。 今後も永くその 志 を渝えぬようにせよ」という意味の事が書いてあった。

ぶれいせんぼん ときむね もちろん お かえ き
実に無礼千万な手紙で、昔の北條時宗でしたら、勿論、すぐにその使いを追い返すか、斬ってしまうか
よしみつ へいき う と よくねん さら
したところだったろうに、義満は平気でこれを受け取ったばかりか、翌年、その使いが帰る時には、更にこ
にほんこくおう しん みなもとの
ちらからまた使いを出してこれを送らせたが、その時、持たせてやった手紙には、自らを、「日本国王 臣 源
どうぎ ねんごう もち
道義」と書いて、年号も明の年号を用いた。

ぞっこく たいど あき は ふこころえ うち
全く日本が明の属国でもあるかのような態度を取ったのです。 実に呆れ果てた不心得で、内には日
ほんぶん わす そと たいめん けが ほ
本国民としての本分を忘れ、外には国家の体面を汚したのです。 それというのも、ただお金が欲しいばか
ひくつ まね あさま み さ にんげん
りにこの卑屈な真似をしたのかと思うと、実に浅猿しい、見下げた人間であったという外はないのです。 な
お彼はこの後もしばしば明との間に使いのやり取りをしたが、いつもその手紙には自分を、「日本国王臣源道
けんこく おおむかし よしみつ ごと たいぎめいぶん みだ
義」と書き、年号は明の年号を用いた。 実にわが建国の大昔 から、この義満の如く、大義名分を乱して、
ふしんふちゆう いま かつ
不臣不忠を働いた者は未だ嘗て一人もいなかったのです。

えいらくつうほう 永楽通宝

よしみつ きげん と ぼうえき いおう めのう
そうしてまでも義満は明の機嫌を取って貿易をしたのですが、こちらから送った物は、馬、硫黄、瑪瑙、
きんぴょうぶ やり たち よろい すずり せんす けんじょう
金屏風、槍、太刀、鎧、硯、扇子などで、いづれも諸国の大名や坊さんなどから幕府に献上したもので
したというので、彼はこれらの物を売りつけると、ただでお金を儲けることが出来たのです。

又、 明から持って帰った物は、古器物や書画や明銭などでしたが、義満はその明銭をそのままわが国内
つうよう がいこくぜん
に通用させたので、この後は外国銭が盛んに世に使われることになった。 昭和の始めにも「永楽通宝」と
りんせん みるせん
いう 1 厘銭が世に残っていたのを見かけることがあるが、これもその時の明銭の 1 つです。

あくうん よしみつ 悪運の強かった義満

よしみつ ごうしゃ きわ せんじょう おこな かみ こうしつ あなど しも した さら こっか ちじよく
こうして義満は豪奢を極め、僭上の行いをして、上は皇室を侮り、下は人々を虐げ、更に国家の恥辱
あま がいこく あくうん つよ った ぶじ いっしょう く
を甘んじて外国にさらしましたのですが、悪運が強かったのか、無事に一生を暮らして、応永 15 年 5 月
な
6 日に 51 才で亡くなった。

しよく あ ゆづ ぜんごあ す
將軍の職に在ること 26 年、職を譲って後の 15 年、前後合わせて 41 年の間、自分の好きなように政治
と かせい さか かつ ごこまつ
を執ったのでして、彼ほど威勢の盛んな將軍は嘗て今までには無かったのです。 後小松天皇は特にその死を
いた ちやくし だじょうほうおう そんごう おく よしみつ
悼まれ、勅使を立てて、太政法皇の尊号を贈られようとした。 思うに、義満が南北朝を合一して、後小
せいとう たてまつ こう おも み
松院を正統の天皇になし 奉った功を重く見られたためでもあったろうが、1 つはまた、後小松天皇の御母
かく よしみつ じゅんぼ じゅん
がお崩れになった後に、義満の夫人を天皇の准母（訳注：天皇の母に準じる意）ということにしてあったた
めでもあったのでしょう。

しかし、いづれにしても、臣下である義満にかかる尊号を贈るということは、全く筋道の違った話な
とうじ くぎょう いっばん むがく したたい あえ
のですが、当時は、公卿なども一般に無学な者が多かったので、そういう失態をも敢てしたのでしょう。 中
しんか ほうおう そんごう たまわ しょうとく み よ ゆげのどうきょう せんれい
には、臣下で法皇の尊号を賜った者には、昔、称徳天皇の御代に弓削道鏡があるといつて、これをその先例
ぶっぼう い み
とした公卿などもいた。 道鏡の法皇は、言うまでも無く仏法の意味から言ったのであって、これを天皇が位

第1話 室町幕府の盛時

譲られた後の尊称である太上皇の法皇と同じに考えるなどは、以っての外の心得違いなのだが、義満の僭上な行いに慣れて、朝廷の公卿達までが、これを不思議に思わなかったのかも知れない。

しかし、幸いな事に、前管領の斯波義将が、大義名分を弁えていたために、將軍の義持に説いて、固くこれを辞して受けさせなかったのが、朝廷の尊厳を傷つけることがなくて済みました。

將軍足利義持

義持は9才の時に足利第2代の將軍に任ぜられたが（訳注：南北朝合体後からでは第2代になるが、尊氏から数えると第4代です）、自分で実際に政治に当たったのは父が亡くなってから後のことです。彼もまた豪華を極めた義満の子であっただけに、常に酒宴を開いて遊び暮らし、品行も悪く、將軍としては大して偉くはなかった。しかし幸い、三管領の斯波義重、細川満元、畠山満家らのような良い家来がいたのと、よく彼らの言う事を聞いて、義満の悪い政治を再び繰り返さないようにしたので、彼の時代は割合によく治まったほうでした。

亡くなった父の義満に対して、後小松天皇が太上法皇の尊号を贈られようとした時に、「臣下にしてそういう尊号を頂くのは恐れ多い」と言って、固く辞退した他に、彼はまた義満が開いた明との交通をも、国の体面を汚してまでも続ける必要はないと行ってこれを停めた。明からはその後もしばしば使いをよこして交際を求めて来たが、義持はその使いにも会わずに、きっぱりとこれを斥けた。その断りの書面の中に彼は斯う言っている。

「父の義満が病に罹った時に、卜って見たら、神々の祟りであったので、父は大いに懼れ、神々に誓って、今度外国の使いを受けることのないようにと、固く子孫に遺言して亡くなった。今、明国の使いに会わないのはその命を奉じただけの事である。昔、元の兵が攻めて来たことが2度ある。その数は何十万というほどであったが、皆、何の功もなくして海に溺れてしまった。これは人間の力のみではなく、実に神兵の力が加わって防いだからである。されば、今、若し貴国が、われの交通を停めたことを怒って来て攻めようとも、われは少しも驚かない。いつでも喜んでお相手をしようと思う。」

義持は堂々とわが威を示して、父の義満が恥を外国にまで曝した不見識をいくらか償ったのです。これらの点では、わが国体をも皇室をも蔑ろにした義満の子としては不思議なくらいに、彼は日本国民としての本分を弁えていたと言ってもよいのであります。

（第1話 室町幕府の盛時 終わり。 次は前頁に戻り、第2話 関東管領と永享の乱 へ）